

琉球大学学術リポジトリ

西部劇を撮ったヨーロッパ人
—アンドリュー・V・マクラグレン

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2023-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西森, 和広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019584

西部劇を撮ったヨーロッパ人 —アンドリュー・V・マクラグレン

西森 和広

初めに

本稿は、本誌前号(29号)に続いて、ハリウッドで西部劇映画製作に携わったヨーロッパ出身者として、「西部劇の監督」という称号に相応しい最後の世代の代表であるアンドリュー・V・マクラグレンを取り上げます。

1) アンドリュー・V・マクラグレン Andrew V. McLaglen (1920-2014)

マクラグレンの伝記的事実については、スティーヴン・B・アームストロングの著書『アンドリュー・V・マクラグレン』(*Andrew V. McLaglen*. 2011)が、著者によるインタビューなども含まれるなど、信頼性の高い著作と言えます。他に、役者でもあり作家でもあるC・コートニー・ジョイナーのインタビュー集『西部人たち』(*The Westerners*. 2009)にもマクラグレンのインタビューの章が含まれています。主に両書を参照しながら、以下にマクラグレンの生涯を辿ってみます。

父ヴィクター・マクラグレンと母イーニッドとの間に、1920年7月28日イギリス、ロンドンに生まれます。父はもちろん、後にフォード一家の重鎮となる名優ですが、アンドリューが生まれた頃はボクサーとして活躍していました。後のイメージとは異なり、マクラグレン家はアイルランド系ではなくスコットランド系で、祖父はプロテスタント教会の聖職者だったようです。息子アンドリューが生まれた頃、父は33歳という年齢や負傷などもあり引退を考えていました。そこへ、I.B. デヴィッドソンというイギリス映画界をけん引していた人物からのオファーがあり、全く経験が無かったにもかかわらず、『ザ・コール・オブ・ザ・ロード』(*The Call of the Road*. 1920)という作品でボクサーの主人公を演じて映画界にデビューします。これが評価を得て、父は長期の契約を結び、以後多くの作品に出演することになります。大きな転機は24年にやって来ます。低迷するイギリス映画界に別れを告げ、父は単身アメリカに渡り、ハリウッドで活躍を始めるのです。二年後、母とアンドリュー、そして妹のシーラの三人は父の後を追ってハリウッドに向かいます。アンドリュー五歳の時でした。

父は堅実に仕事をこなし、高い評価を得るようになり、ジョン・フォード監督の『男の敵』(*The Informer*. 1935)ではアカデミー主演男優賞を獲得することになります。31年、父がロスアンゼルス北のラ・カニャーダに広大な土地を購入し、家族はそこに移り住みます。父は自身がボーア戦争に従軍しようとして、学校を辞めたといっ

た経験もあった程で、ハリウッドで成功した父親としては珍しく、子供たちの教育に執心するということはありませんでした。特にエリート校を目指すように仕向けるということもなく、その意味でアンドリューは伸び伸び自由に育ったのでしょう。一応大学進学を目指して高校に進みはしましたが、成績も今一つだったようです。しかし高校時代には短篇映画の制作を試みるなど、映画への関心を高めていました。当初より彼は父親のような俳優ではなく、制作・監督の道に進みたいと考えていたようです。結局すんなり大学に進学することはできず、その後別の準備学校に再入学して再挑戦し、何とかヴァージニア大学への進学を果たします。実は同大学を選んだのは、父親の血でしょうか、評判のボクシングチームがあったためだったようなのですが。大学時代に知己を得た中には、やはり後に名監督となるロバート・アルドリッチがいました。しかし、結局一年で大学を辞めてしまいます。本人によるとある恋のせいということですが (Armstrong: p.7)、そもそもあまり学業に熱心ではなかったのかもしれませんが。両親もそれを咎めませんでした。40年の夏、カリフォルニアに戻った彼は仕事を探し、ロッキード社に職を得ます。同社の社長だったロバート・グロスが両親の友人でした。実は当時、時節柄、軍からの招集もあったのですが、こちらは身体検査の結果、不適合 (4-F) となってしまいます。その理由は何と大きすぎるというものでした。当時彼は6フィート7インチ、つまり2メートルの長身だったのです。大きすぎても良くないというわけです。

ロッキード社では製品管理のような係 (expeditor) に就きます。折から同社の仕事は忙しく、彼の仕事も長時間に及ぶことが多かったようですが、私生活ではジョン・フォードの子供たちとは友人で、この名監督の家に招待されることもあったようです。ただし、映画界の話だけは厳禁だったとのことですが (Joyner: p.64)。43年3月、マクラグレンはペギー・ハリソンという女性と結婚をします。二人の間にはシャロンという娘も生まれますが、この最初の結婚は長続きせず、45年には離婚します。

ロッキードでの仕事は続いていましたが、その中、デヴィッド・O・セルズニック制作、クローデット・コルベールとジョゼフ・コットン共演の『君去りし後』 (Since You Went Away, 1944) に端役として映画初出演を果たします。この頃から次第にマクラグレンは明確に映画界入りを志向し始めます。もちろん、父ヴィクターの映画界における「顔」がこの起用にもつながったものでしょう。しかし父は、息子の自由意志を尊重する姿勢を変えることはなく、息子の映画界入りについても、賛成はしないものの、敢えて反対もしない、というスタンスであり続けたようです。出演作はもう一本あるようですが、元々俳優には興味が無かった彼は別の道を模索します。

45年、マクラグレンはリパブリック社の社長ハーバート・J・イエーツに手紙を書き、何とか『愛、名誉、そして別れ』 (Love, Honor and Goodbye, 1945) という作品で制作事務 (production clerk)、つまり雑用係のような職を得ます。実は同作には父ヴィ

クターも出演していました。やはり何の彼と言っても、父親の存在は大きかったと言えるでしょう。なお同作に出演していた女優ヴェダ・アン・ボルグと、翌年二度目の結婚をすることになります。二人の間には父と同じアンドリュウという名を付けられた息子が一人生まれ、夫婦の関係は58年の離婚まで続きます。続くジョン・ウェイン主演の西部劇『ダコタ荒原』(Dakota. 1945)でも、マクラグレンは同じ仕事で働くのですが、いわばこれがその後長きにわたるマクラグレンとデュークの「共作」の始まりとなるわけです。その後、ロイ・ロジャースやジーン・オートリー主演の「歌うカウボーイ」物などや、ジョン・ウェインが出資した『拳銃無宿』(Angel and the Badman. 1947)なども担当します。

やがて何とか第二監督助手に昇進したのも束の間、第二次世界大戦従軍者の雇用優先の社の方針により、レイオフされるという憂き目を見ます。仕方なく、彼は再びロッキード社に戻って以前と同じ仕事を続けます。49年、アラン・ドワン監督、ジョン・ウェイン主演の『硫黄島の砂』(Sands of Iwo Jima. 1950)で、第二監督助手としてリパブリックに再雇用されます。ウェインの推薦があったのかもしれませんが。同作はアカデミーの主演男優賞などにノミネートもされる大ヒットとなります。リパブリック社とは継続雇用の契約を結んだわけではなかったのですが、以降マクラグレンはロッキード社を完全に辞め、映画界で仕事を続ける道を選びます。続くジョゼフ・ケーン監督の『ロック・アイランド・トレイル』(Rock Island Trail. 1950)では第一助手に昇進しますが、リパブリック社での次の仕事を待つことなく、モノグラム社のバッド・ベティカー(当時はオスカー・ベティカー)監督作品『キラ・シャーク』(Killer Shark. 1950)の第一助手として雇われます。その際、ベティカーからマクラグレンは、彼がメキシコ時代の経験に基づいて書かれた闘牛士を主人公にした物語の原案を見せられます。マクラグレンはこれを『拳銃無宿』で知り合ったジェームズ・エドワード・グラント(同作の脚本と監督を担当)に見せ、グラントがウェインに見せます。こうしてウェイン出資、グラント脚本、ベティカー監督、そしてマクラグレン助監督で撮られたのが『美女と闘牛士』(Bullfighter and the Lady. 1951)で、ベティカーの名を高める作品となりました。

次の作品はジョン・フォード監督の『静かなる男』(The Quiet Man. 1951)です。再びリパブリック社の仕事で、第一助手はすでに決まっていたので、第二助手で良ければという話でした。マクラグレンはケーン監督作品ですでに第一助手を務めていましたが、それはいわゆる「B級」作品でした。マクラグレンの評価はまだそのくらいだったのです。他方、今回の作品はフォードを監督に迎え、リパブリックとしては破格の大型予算で臨む大作でした。父ヴィクターも出演します。マクラグレンは喜んで引き受けます。結果、同作はリパブリック唯一のアカデミー作品賞ノミネート作品となり、父も助演男優賞にノミネート、そしてフォードは四度目となる監督賞を受賞と

いう大成功作品となります。何よりマクラグレンにとっては、フォード監督の下で働いたという経験は大きかったはずで。その後、フリーランスとして専ら「B級」作品の仕事をした後、ジョン・ウェインのオファーを受け、彼の制作会社（当初はロバート・フェローズとの共同出資のウェイン＝フェローズ社、フェローズが手を引いた後はバトジャック社）の専属となります。

55年について監督デビューを果たします。金庫破りを強要される錠前師の物語『マン・イン・ザ・ヴォールト』(Man in the Vault. 1956)がそれで、脚本はバート・ケネディによります。後に監督に転身し、西部劇映画の黄昏の時代をマクラグレンと共に担うことになる人物です。彼は、ある西部劇作品の脚本を仕上げていたのですが、バトジャックの事務所に一年ほど眠ったままになっていました。これに強く惹かれたマクラグレンは同作の監督も希望します。しかし残念ながら監督はバッド・ベティカーに任されることになり、彼はウェインの弟ボブ・モリソンと共に制作を担当することになります。それが『七人の無頼漢』(Seven Men from Now. 1956)でした。その代わり、同じケネディ脚本の西部劇が任されることになります。それがマクラグレン初の西部劇監督作品となった『ガン・ザ・マン・ダウン』(Gun the Man Down. 1956)です。主演はマクラグレンの友人ジェームズ・アーネスでした。彼はCBSテレビの「ガンスモーク」のシリーズに主演し、人気が出ていたところでした。彼がCBSにマクラグレンを監督として強く推薦したことから、マクラグレンは同社との長期契約を結び、以後しばらくの間テレビを活動の中心とすることになり、西部劇物を中心に（その中には「ローハイド」や「ベリー・メイソン」シリーズのエピソードなども含む）多くの作品の監督を務めます。

テレビ界での活躍が中心であった時期にも幾つかの映画の仕事も引き受けています。その中の一つに、贗金造りの名人を出獄させるために、リンカーン大統領の遺骸を盗み出して「人質」に取るという実際にあった事件に基づく犯罪物『誘拐者』(The Abductors. 1957)があります。主演は父ヴィクターでした。マクラグレンにとって、本作は父が出演する映画唯一の監督作品となりました。ヴィクターは、息子が長らく第二助手を務めていたことをからかって、「自分が死ぬまでには第一助手にする」と、よく冗談を言っていたそうです (Armstrong: p.14)。同作の公開の二年後、1959年の秋に父は亡くなります。

62年、ウェインのオファーで撮った『マクリントック』(McLintock! 1963)が転機となります。同作の大ヒットはマクラグレンの名を一挙に高めたと言えるでしょう。テレビの仕事は65年まで続けられますが、その後は完全に映画界に復帰します。最も多く共に仕事をした俳優はやはりウェインですが、おそらくこれもフォード晩年の良好な関係が影響しているのでしょうか、ジェームズ・スチュアートともかなりの数の作品を手掛けることとなります。その第一作となったのは南北戦争時のヴァー

ジニア州を舞台にした、反戦思想の濃厚な西部劇『シェナンドー河』(Shenandoah. 1965)でした。その後も西部劇を中心に幾つもの作品の監督を務めます。しかしすべてが順調というわけではなく、例えば『大西部への道』(The Way West. 1967)は、カーク・ダグラス、ロバート・ミッチャム、リチャード・ウィドマークという当時のドル箱スターを揃えたにもかかわらず、制作側の問題もあり、不発に終わっています。それでもマクラグレン自身に大きな傷はつかず、その後も着実に仕事をこなして行きます。

こうして、バート・ケネディと共に、コンスタントに西部劇を撮る数少ない監督として活躍を続けるのですが、『ビッグケーヒル』(Cahill, United States Marshal. 1973)、『大いなる決闘』(The Last Hard Men. 1976)と西部劇作品が続けて不発で終わった頃から風向きが変わって来ます。時代の好みが変わってきたことをマクラグレンも感じ始めたのでしょうか。その後は再びテレビ界に仕事を求めざるを得なくなります。その一方、イギリスの制作会社からのオファーで撮った傭兵隊物『ワイルド・ギース』(The Wild Geese. 1978)が世界的な大ヒットとなり、以後ヨーロッパを映画制作の拠点とするようになります。しかしそれも、『プリンス・マルコノ地中海の標的』(Eye of the Widow. 1991)の失敗から、映画及びテレビからも実質的な引退となります。その代わり、90年代以降は、移住していたワシントン州サン・フアン島に創設された地方劇場のために、舞台作品の監督をコンスタントに務めて、第二の人生を送ります。2014年8月30日、サン・フアン島のフライデー・ハーバーで亡くなります。

2) マクラグレンの西部劇

『ガン・ザ・マン・ダウン』(Gun the Man Down. 1956)

【梗概】 マット・ランキン、ラルフ・ファーリー、レム・アンダーソンの三人は、パレス・シティの銀行を襲撃し、四万ドルを奪うが、レムは銃創を受ける。何とか荒野の隠れ家までたどり着くが、ランキンとファーリーはレムを足手まといに思い、彼の恋人のジャニスをも説得して、一人レムだけを残して逃走する。間もなくレムは追跡隊に捕らわれる。一年の囚役を終えて釈放されたレムは三人の行方を追ひ、友人でガンマンのピリー・ディールから聞き、その所在を突き止める。とある鉱山町でランキンはファーリーと酒場を経営し、ジャニスは彼の愛人になっていた。町に入る早々、レムはファーリーを殴り倒し、保安官のモートンから警告を受ける。ランキンは、レムの殺害を依頼するため、ピリーを呼び寄せる。ホテルにレムを訪れたジャニスは、愛していたと告げ、ピリーの件を教える。ランキンはピリーに、レムの殺害を五千ドルで依頼する。ピリーは自分がレムの友人であることを告げながら、金を受け取る。ピリーはレムの説得に耳を貸さず、対決は避けられない。銃声がランキンらの待つ酒場まで

響き渡る。モートンが現れると、ピリーが受け取った五千ドルをランキンに返す。倒れたのはピリーだった。ランキンはファーリーとジャニスを連れて町から逃げ出す。拘束されたレムに、好意的な保安官助手リーはコーヒーを振る舞う。正当防衛を認め、モートンはレムを釈放するが、重ねて法の順守を警告する。レムは三人の後を追う。ランキンは居場所を教えようとしたジャニスを撃ち、また誤ってファーリーも撃つてしまう。レムはランキンをついに追い詰めるが、殺さず、殴り倒してモートンの許に運ぶ。モートンは、二人の殺害の件でランキンが絞首されると告げる。モートンとリーに見送られ、レムは一人去る。

．．．

先述の通り脚本はパート・ケネディですが、本人が「書き直し」(rewrite)をした、と言っているのが気になります (Kennedy: p.64)。別の人の書いた元の本を、という意味なのか、自分で書いたものを手直したという意味なのか。クレジット上は彼の名前だけです。仲間と恋人に裏切られた男の復讐物語で、彼の作としては割と単純なプロットです。いかにも「B級」プログラム作品というところですが、主人公が最後に敵を殺さないで法の裁きに委ねるといふ点などは少しひねりが利いているとは言えます。しかし、ランキンがジャニスとファーリーを殺したことで、彼が絞首刑になる蓋然性が生まれたわけですが、もし殺していなかったら、レムはどうしていたのでしょうか。彼を捕まえて保安官に渡したところで、彼が強盗の主犯だったと訴えるくらいしか手はありませんし、それなら最初からそう訴えていれば済んだ話です。まあ野暮は言いつこなしてでしょうか。

本作の見どころは何と言っても、マクラグレンの監督二作目とは思えない堂に入った演出振りと、撮影のウィリアム・H・クローシアによる見事なモノクロ画面の美しさ、喚起力にあると言えるでしょう。クローシアはフォードの『アパッチ砦』で助手を務めるなどの経験を積み、先述の『七人の無法者』では見事な仕事ぶりを見せていました。そして本作以降、マクラグレン作品やフォード作品の常連カメラマンとなります。その見事なカメラワークに任せて、マクラグレンは、登場人物の心理を描きだす演出に力を入れています。とりわけ素晴らしいのが、ピリーがレムの姿を求めて通りを練り歩く場面です。そこに、酒場で固唾を呑んで「その時」を待つランキンやジャニスの姿がクロスされて描かれます。手法としては定番ですが、焦らず慌てず、じっくりと間(ま)が取られて映し出され、緊張感を高めます。その頂点のピリーとレムの対決の瞬間は、二人の手が銃に掛かるところまでしか映さず、直ちに画面を酒場に切り替えたところで、銃声が響き渡ります。勝ったのはどちらか、その緊張感は、モートン保安官がピリーの報酬金を持って現れるまで続きます。このカタルシス、費やされた時間の何と豊かなこと。悠揚迫らぬこの見事な間が、残念なことに、後の作品では見られなくなります。マクラグレンがこの後も「B級」西部劇を撮り続けてい

たらと、思わずにはいられません。

主演レム・アンダーソンは、先述したジェームズ・アーネス、テレビ界でスターになりますが、映画では脇役が中心です。共演は、マット・ランキンに重厚な強面の常連ロバート・ウィルク、保安官モートンに『シェーン』(Shane. 1953)の敵役ルーファス・ライカーで有名なエミール・マイヤー、保安官助手リーはおなじみのハリ・ケリー・ジュニアがいつもの彼らしい役どころ(好感の持てる、しかしやや単純素朴な若者)、レムの恋人ジャニスに売り出し中のアンジー・ディキンソン、もう一人の悪党ラルフ・ファーリーにドン・メゴワン、ピリー・ディールにマイケル・エメットなどです。ウィルクやマイヤーがベテランらしい良い味を出していますが、中でも『リオ・ブラボー』(Rio Bravo. 1959)で一躍脚光を浴びる前のディキンソンが、磨かれる前の原石といった感じの、初々しい熱演をみせてくれます。

『マクリントック』(McLintock! 1963)

【梗概】 ジョージ・ワシントン・マクリントック(通称G・W)はテキサスの高原地帯にある、その名もマクリントックという町の近郊に広大な放牧地や鉱山を有する地域の大家。しかし、妻キャサリンは彼の浮気を疑って東部に去り、一人娘のベッキーも東部の大学に入って、もう二年も独り身の状態だ。学業を終えてベッキーが帰って来ることになる。しかし、娘に西部で埋もれて欲しくないキャサリンは、彼女を東部に連れ戻そうと、G・Wに離婚と娘の親権を要求しに帰って来る。一方、G・Wは、懇請されて若い入植者デヴリンを牧童に雇い、またその母で未亡人のルーズに惹かれて、彼女もコックとして雇う。キャサリンは夫と彼女との関係を疑い、牧童頭のドラゴなどにも当たり散らす。ベッキーの帰郷が町を挙げて祝われる。G・Wの長年の対立者ダグラスの息子のマット・ジュニアも彼女と一緒に東部から帰って来ていた。彼がしきりにベッキーに近づくのが、やはり彼女に好意を寄せているデヴリンは気に入らない。デヴリンが二人を乗せた馬車をわざと乱暴に走らせ、ベッキーの憤激を買う。彼女は父に言いつけるが、事情を聞いたG・Wは彼の肩を持ち、彼がベッキーの尻を叩いて「お仕置き」するのを許す。しかしベッキーも内心はデヴリンに惹かれていた。G・Wの友人のコマンチの族長ピューマらが、彼の弁護の効無く、遠方の居留地に移されることになる。G・Wは町の老人バニーを使って、コマンチに武器が渡るように仕向ける。独立記念日で町が賑わう中、コマンチが蜂起し、ピューマらは逃走する。町が大混乱に陥る中、これまでの鬱積を晴らすかのように、G・Wは逃げるキャサリンを追い詰めて捕まえて「お仕置き」し、離婚を宣言する。しかしキャサリンは走り去る馬車を追いかけて飛び乗る。今や従順な妻となったキャサリン。夫婦はめでたく縊りを戻す。

・・・

これは全くのスラップスティック、パロディ的作品です。舞台は標高 6000 フィート (1800 メートル) を越える場所にあるテキサスのとある町。周囲には豊かな放牧地が広がる一方、鉱山もあります。近隣にはコマンチ族も住み、またメキシコ系の住民も多くいます。しかし現実にはこういう条件に適った土地が果たしてあるのでしょうか。西部劇によくある各種の設定を混合してみた、というのが実際でしょう。描かれる様々な挿話自体がまた、いずれも西部劇によく見られる要素の混合です。新来の入植者 (homesteader) と放牧業者 (rancher) の対立、白人と先住民の間の軋轢、リンチ騒ぎや全員参加の乱闘騒ぎ、先住民の蜂起、町を挙げての帰郷祝い、もちろん一対一の殴り合いもあり、最後にはロデオ大会も見られます。それほど大きな町とは思えません、日々何かが起こります。しかし、ただそれらは次々と連ねられて描かれるだけで、特に必然性や整合性は感じられず、また歴史的な意味合いが込められているようにも見えません。入植者と放牧業者の対立がどういう結果をもたらすのか、蜂起したコマンチたちはどうなるのか、そういう問いは一切なされませんし、またそれを考える人もいないでしょう。よく言って、これは一つのファンタジーです。西部劇の姿をしてはいますが、要はただのホームコメディなのです。ともかくも、これだけの様々な要素を一つにまとめた監督の力量は認めるべきでしょう。

本作は、テーマそのものが直ちにシェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』を想起させます (Armstrong: p.134)。そしてそれは制作側でも意識したはずで、おそらく意図的に同作をなぞったと思われる点があります。例えばヒロインの名キャサリン (Katherine)。シェイクスピアは若干イタリア風にキャタリーナ (Katherina) としていますが、もちろん両者は本来同じ名ですし、愛称は全く同じケイト (Kate) です。そして、両作共にヒロインはその愛称で呼ばれることを嫌っています。シェイクスピアでは、それを知った求婚者のペトルーチオがわざと愛称を連呼して挑発する場面があります (第二幕第一場)。一方、本作では、牧童頭のドラゴがうっかり彼女を愛称で呼んでは度々叱責されています。例の尻たたきについては、はっきりそうと言えるわけではありませんが、演出次第ではそれも可能かと思われるような、お尻に関する微妙なやりとりの場面もあります (同幕同場)。

本作はまた、フォードの『静かなる男』との関連もしばしば指摘されます (Armstrong: *ibid.*)。まず主役の俳優二人が同じジョン・ウェインとモーリン・オハラです。ヒロインの名はメアリー・ケイトで、ここにもケイトが入っています。尻叩きこそありませんが、主人公のショーンが、メアリー・ケイトを強引に引っ張って駅から彼女の兄の家まで、物見高い近隣の住民も引き連れて延々と行進する有名な場面は、まさしく「じゃじゃ馬ならし」です。本作のラストの場面、G・W・マクリントック (ウェイン) が町中の野次馬連を引き連れて突き進み、最後にキャサリン (オハラ)

を追い詰めて尻を叩く場面がこれのパロディであることは間違いないでしょう。そして、これはあまり指摘されていないようですが、もう一つ別のフォード作品との関連にも触れておきましょう。それは『リオ・グランデの砦』(RioGrande. 1950)です。まず主役が同じウェインとオハラで、二人が演じる夫婦はやはり別居しており、一人きりの子供(こちらでは息子)が父の許に帰る(向かう)ことで物語が始まり、そして最後は夫婦の和解に到る(であろう)という展開で、実によく似ています。ただし、妻が夫の許を去った原因は、南北戦争時に南部にある妻の実家を北軍将校である夫が焼き払わせたためというものでずっと深刻なのですが。

制作はバトジャック社ウェインの息子マイケル・A・ウェインが担当。デヴリン役にウェインの別の息子パトリック、さらに娘のアイサも子役で出演しており、まさしくウェイン・ファミリー映画です。主役のウェインとオハラの他に、ベッキー役にステファニー・パワーズ、ドラゴ役にチル・ウィルス、ルイズ役にイヴォンヌ・デ・カーロ、パニー役にエドガー・ブキャナン、ピューマ役にマイケル・ペイト、さらにブルース・キャボット、ストローサー・マーティン、ボブ・スティール、レオ・ゴードンなど西部劇の古株連の総出演といった趣です。脚本のジェームズ・エドワード・グラントは、上でも名を挙げたウェイン制作主演の『拳銃無宿』でも脚本と監督を担当していました。実は同作でハリー・ケリー(父親の方)が演じていた保安官の名が本作の主人公と同じマクリントックでした。またこれは偶然でしょうか、アンソニー・マン監督の『怒りの河』(Bend of the River. 1952)でジェームズ・スチュアートの演じた主人公の名もまた同じでした。なお、本作のカメラもウィリアム・H・クローシア、間違いがありません。

『シェナンドー河』(Shenandoah. 1965)

【梗概】ヴァージニア州シェナンドー河の近くで、チャーリー・アンダーソンは七人の子供たち(六人の息子と一人娘)、それに次男ジェームズの妻アンと共に農場を営んでいた。南北戦争も大詰めだったが、奴隷制に批判的な彼は南軍への協力を拒み、息子たちを一人も入隊させなかった。娘ジェニーが、幼なじみで南軍士官のサムの求愛を受け入れて結婚するが、その当日に招集される。アンに女の子が誕生し、チャーリーの亡き妻マーサの名が与えられる。ある日、末息子のボーイが、拾って被っていた南軍の帽子のせいで、間違われて北軍の捕虜となる。友達で黒人奴隷のガブリエルから事情を聞いたチャーリーは、ジェームズとアンに留守を任せ、他の子供たちを連れてボーイを取り戻しに出発する。北軍部隊司令官のフェアチャイルド大佐から釈放の指令書を受け取ったチャーリーは、捕虜護送の列車の出発駅に向かう。だが、責任将校は時間がないとボーイの探索を拒絶する。チャーリーらは先回りして、線路を塞いで列車を止め、将校から銃を奪うと、捕虜全員を解放する。そこにボーイ

の姿はなかったが、サムが乗っていた。サムは捕虜たちに列車の焼却と帰郷を命じて、アンダーソン一行に加わる。ボーイは別の収容先に居た。捕虜たちが脱走を企て、ボーイも一緒に逃げだし、抗戦を続ける部隊に合流する。ボーイも銃を取るが、負傷して倒れる。そこに一人の敵兵が立ち足はだかる。それはガブリエルだった。一方、ジェームズとアンは農場に現れた三人の男に襲われる。ボーイの搜索を諦めたアンダーソン一行は家路に就く。途上、若い南軍兵士の誤認からジェイコブが銃弾を受ける。ジェイコブの遺体を運んで、一行が家に帰り着くと、居合わせた医師ウイザースプーンの口から長男夫婦の死を知らされる。しかしマーサは無事だった。いつものようにアンダーソン一家は教会のミサに遅れて出席する。そこへボーイが杖にすがって入って来る。

・・・

西部劇第三作目は、前作と打って変わってシリアスなテーマに挑んでいます。制作はユニヴァーサル。脚本はジェームズ・リー・バレット、この後マクラグレンと度々仕事をし、共同制作も手掛けることになります。撮影はいつものウィリアム・H・クローシア。しかし何と言っても大きいのは主演のジェームズ・スチュアートの存在です。彼が登場するだけで、すべてが本物になります。彼の演じるチャーリー・アンダーソンは頑固一徹の唯我独尊タイプ。誰の意見も受け付けません。スチュアートがアンソニー・マンと撮った一連の西部劇作品に於ける、執念の復讐者の面影を見るようです。しかし、本作での彼は幾らか歳を重ね、やや疲れたようにも見えます。ボーイの姿を求めて、旅立ちますが、ついには結局、諦めてしまいます。結局ボーイは自力で帰還したのです。チャーリーの行動は、彼にとっては絶対の使命だったのですが、二人の息子と嫁を失い、結果だけ見れば、何もしない方が良かったと言えます。しかし、彼はそうせずにはいられなかったのです。しかし、ジェームズとアンの子、マーサが残されました。ボーイも生きています。家族は苦難を乗り越えて生き続けるのです。

他の配役は、長男ジェイコブ役に専らテレビで活躍したグレン・コーベット、次男ジェームズにパトリック・ウエイン、その妻アン役にこれがデビュー作のキャサリン・ロス、ボーイ役は『アラバマ物語』(To Kill a Mockingbird. 1962)でグレゴリー・ベック演じる弁護士の子息役で知られるフィリップ・アルフォード、そしてフェアチャイルド大佐役のジョージ・ケネディなど。西部劇の顔の一人、曲者俳優のジョン・マッキンタイアの息子ティム・マッキンタイアがチャーリーの息子の一人ヘンリー役で出演しているのがうれしいところです。目立った活躍はありませんが。

『スタンピード』(The Rare Breed. 1966)

【梗概】1884年、セントルイスで開催中の牧畜業者博覧会。亡夫の遺志を継いで、

アメリカにヘレフォード種牛の生産を根付かせようと、マーサ・エヴァンズは娘のヒラリーとイギリスからやって来た。角の無い同種は鉄道輸送に最適だからだ。テキサスの放牧業者ポーウェンの代理人エルズワースが種牛の「ヴィンディケーター」を二千ドルで入札。腕利きの牧童サム・バーネットはテキサスへの移送を請け負うが、実は競りに負けた別の業者テイラーから、道中で牛を配下のメイブリーとサイモンズに渡すよう千ドルの報酬で依頼されていた。サムは、怪我で失業中の牧童ジェフのため、彼の恋人のガートに千ドルを渡して、ドッジシティ行の列車に牛と共に乗り込む。しかし列車にはマーサとヒラリーも乗っており、テキサスまでの道案内を頼まれる。当初こそテイラーとの取引を実行しようとしたサムだが、マーサとヒラリーの熱意に心を動かされ、実行をためらう。道中で、牛の群を追うポーウェンの息子ジェイミーと合流する。サイモンズは仲の悪いメイブリーを殺害後、牛の群を暴走させ、混乱に乗じてマーサから金を奪う。サムは何とか彼を倒して金を取り戻すが、裏取引の件をマーサに知られてしまう。一行は、負傷したジェイミーとヴィンディケーターを伴いポーウェンの許にたどり着く。しかしポーウェンは、ヘレフォード種の飼育は無理だと取り合わず、もしヘレフォード雑種の子牛が生まれたらすべてサムに渡すと約束する。サムはヴィンディケーターを放牧するが、冬が終わり、雪に埋もれて死んでいるのが見つかる。ポーウェンがマーサに求婚する一方、ヒラリーとジェイミーの仲も深まる。夏、サムはヴィンディケーターそっくりの子牛を見つけて歓喜する。ポーウェンは、知らせを聞いたマーサの様子を見て、彼女が愛しているのはサムだと知る。時が流れ、マーサとサムの牧場には多くのヘレフォード種牛が育っていた。

・・・

原題の「稀な種」とは、もちろん本作に登場するヘレフォード種の牛のこと。牧草の食性効率も良く、育ちも早いため、現在では全米で広く見られる品種のようです。作中、好演を見せる牛の愛称ヴィンディケーター (Vindicator) とは、「正当性を立証する者」といった意味で見事なネーミングと言えるのではないのでしょうか。西部劇と牛とは切っても切れない関係ですが、牛の品種に焦点を当てて見事なドラマに仕立て上げたことが第一の美点と言えるでしょう。脚本のリック・ハードマンは、これまで「ローハイド」シリーズなど数多くのテレビ西部劇で仕事をしてきたベテランです。

配役では、何と言っても主演ジェームズ・スチュアートの存在感です。真摯で熱意に満ち、しかもそれを内にじっと抑え込んでいるような人物を演じさせて彼の右に出る役者はいません。その独特の表情と口調で訴え掛けられると、グッと来ます。また、モーリン・オハラが、アイルランドではなくイングランド女性のマーサを演じているのも興味深いところ。娘ヒラリー役のジュリエット・ミルズは、ピリー・ワイルダー監督の『お熱い夜をあなたに』(Avanti! 1972)のヒロイン役で名を挙げることになります。ジャック・イーラムの悪党サイモンズ、ハリー・ケリー・ジュニアのメイブリー、

牧童ジェフ役のベン・ジョンソンなど、いつもの顔が揃っています。中でも、鮮やかな赤髪、赤ひげの、やたら巻き舌で話す（本当にこれはスコットランド訛りなのでしょうか?）、スコットランドの元軍人で大牧牛者ポーウェンを演じたブライアン・キースの怪演振りは見事です。タータンチェックの衣装をまとい、バグパイプの演奏まで披露してくれます。マーサがイングランドから連れて来た牛に抵抗を示すのも、スコットランド魂ということでしょう。マクラグレンの父祖の地への思い入れが表れているかのようです。

しかし色々気になる点もあります。前半は野外撮影中心の鮮やかな景色が生き活きと描かれています。後半のポーウェンの牧場場面はスタジオ撮影が中心で、所々にスクリーン・プロセスの使用もあるなど、「作りもの」感が増し、前半と後半はまるで別の作品のように見えてしまうのです。また、マクラグレンは殴り合い（fist fight）場面が好きようで、ほとんどの作品で眼にしますが、本作では巻頭すぐに全員参加の大乱闘、中盤にサムとサイモンズ、そして最後にサムとポーウェンと、三度も殴り合いがあります。果たしてこれほど必要なのでしょうか。最後のものは分からなくはありませんが、これだけ頻繁では効果も薄いと思われれます。時間稼ぎにしか思えないのですが。最も問題なのは、マクラグレンが作品をシリアスなものにするか、コメディにするかを迷っているのではないかと感じられる点です（実はこれは、彼の他の作品についてもしばしば言える問題なのですが）。プロットの点から見ると、本作はコメディに向いているように思われれますし、実際、特に前半部はコミカルな調子に覆われています。冒頭の殴り合いの場面はまさしくそれですし、途中のサムとサイモンズ、それにメイブリーも加わる殴り合いも全くコメディそのものです。エヴァンズ母子とサムとの会話も掛け合い漫才のようになります。極めつけはポーウェンです。彼の人物像などは冗談としか思えません。しかしコメディに仕立てるならば、誰も殺さないのが鉄則です。サイモンズはメイブリーを殺し、結局サムに殺されますが、これで一挙にコメディ色は失せてしまいます。前半と後半が別作品のようだと書きましたが、大きな変わり目はここかもしれません。ポーウェンという喜劇的人物をせっかく配しながら、もう一つ笑えなくなるのです。ジャンルの混合が悪いとは思いませんが、本作がもうひとつまとまりに欠ける感じを残すのもそのせいではないでしょうか。サイモンズを演じるイーラムはコメディも出来る役者です（むしろ後期の彼はそういう役が多い）。またメイブリーのハリー・ケリー・ジュニアは、「虫も殺さぬ」といったおっとりした役に持ち味のある俳優です。何も彼を殺さなくても、そう思われるのです。

もう一つ蛇足です。サムが見つけた子牛は、ヴィンディケーターと、ポーウェンが飼育しているロングホーン種（その名の通り長い角の品種）の牝との間の雑種として誕生したはずですが。しかし彼は、全くヴィンディケーターのミニチュア、つまり完全

なヘレフォード種にしか見えないのですが。

『大西部への道』(The Way West. 1967)

【梗概】 1846年、上院議員ウィリアム・タドロックはミズーリ州から合衆国領となったオレゴンに向けて開拓団を率いて出発する。彼は、妻が自殺したことで大統領への道を諦め、新天地に理想の町を建設する夢を抱いていた。渋るディック・サマーズを先導に雇い、開拓団は出発するが、そこには多くの苦難が待っていた。しかしタドロックは固く非情な意志で突き進む。団員のジョン・マックが誤ってスー族の子供を殺したことで、スー族の攻撃を受けそうになるが、彼を縛り首にして回避する。サマーズの迂回の提案を退け、時間の節約のため広大な砂漠を横断する。ついに団員たちは反抗に立ちあがり、ライジ・エヴァンズをリーダーにする。目的地を前に大渓谷の断崖上に到る。別の土地を目指すか逡巡するが、最後はタドロックの熱意に打たれたエヴァンズに従い、ロープと滑車を使って降りることになる。最後のタドロックの時、一人残っていたマックの未亡人アマンダがロープを切る。タドロックの墓碑銘を刻むと、一行が新天地へと進む一方、サマーズは一人ブラックフット族の土地へ向かう。

．．．

制作は、バート・ランカスターと組んだヘクト＝ランカスター社の倒産後に新設したハロルド・ヘクトの新社。原作はA・B・ガスリーの同題の1950年のピューリッツァー賞受賞作品。幌馬車隊物と呼んでおきます。ジェームズ・クルーズ監督の『幌馬車』(The Covered Wagon. 1923) 以来の伝統がありますが、ラオール・ウォルシュ監督、ジョン・ウェイン主演の『ビッグ・トレイル』(The Big Trail. 1930) の例でも分かるように、プロットそのものが類似で単調になりやすく、また大作志向で失敗のリスクも大きくなります。また、夢の実現のためには非情に徹するタドロック、先住民の妻に先立たれた世間に背を向けて生きるサマーズ、そして反抗心の塊のようなエヴァンズという主役たちの組み合わせがすでにステレオタイプです。しかも配役がカーク・ダグラス、ロバート・ミッチャム、リチャード・ウィドマークでは、これもまた適役に過ぎます。制作(あるいは配給)側の意向でしょうか、登場人物間の愛憎の挿話が多いのも、かえって邪魔のように思われます。公開直前に巻頭部分を二十分以上もカットされるなど、散々な結果は当然だったかもしれません。若い「誘惑者」マーシーを演じるサリー・フィールドは本作が実質的なデビュー作、チャーミングです。ウィリアム・H・クローシアによる見事な映像美が最大の魅力と言えます。

『ジョージのパラード』(The Ballade of Josie. 1968)

【梗概】 ワイオミング準州アラバホ。ジョージ・ミニックは酔って乱暴を振るう夫を誤って死なせてしまう。裁判では情状酌量されたが、自活できるまでという条件で、

義父に息子を取り上げられる。色々試みて失敗した後、牧牛を考えるが、友人の牧牛者ジェイス・メレディスに牛は苦勞が多い、羊の方が易しいと言われたことから、羊を飼うことにする。しかし、ジェイスも含め近隣の牧牛者の反発を買う。しかし彼らの妨害に、彼女は銃を取って闘う。女性住民たちはデモを展開、やがて事は准州の州昇格にも関わる問題となる。ジェイスも彼女の援護に回り、急先鋒の牧牛者アーチ・オグデンと対決。結局、彼が彼女の羊を買い取り、牛を安価で提供して牧牛業への転換を手助けすることで丸く収まる。ジョージは息子を取り戻し、ジェイスはワイオミング州上院議員を目指す。

．．．

ドリス・デイ主演のコメディ西部劇です。制作はユニヴァーサル。エグゼクティブ・プロデューサーのマーティン・メルチャーはデイの夫です。彼女にとっては、ミュージカル物の『カラミティ・ジェーン』(Calamity Jane. 1953) 以来の西部劇。公開当時はテレビ作品並みと評され、デイ本人もそれを認めるくらいだったようです(Op.cit.: p.145)。確かに、二時間近くを持たせるのはきつい内容かもしれませんが。ただフェミニズムの観点から、その先進性が評価されています(Hardy: p.301)。先の『マクリントック』とは対極にあるわけですが、これでも分かるように、マクラグレンという監督は、師であるフォードとは異なり、およそ社会的な問題にコミットするという人ではなかったと思われます。あくまでも職人だったのです。撮影はミルトン・R・クラスナーに替わっています。『イブの総て』(All About Eve. 1950)、『七年目の浮気』(The Seven Year Itch. 1955) など多数の名作を手掛けたベテランです。他の配役は、友人ジェイスに「スパイ大作戦」シリーズで有名になる直前のピーター・グレイヴス、オグデン役にジョージ・ケネディ、そして判事役にアンディ・ディヴァインという懐かしい顔(声)もあります。

『バンドレロ』(Bandolero! 1968)

【梗概】南北戦争終結後のテキサス。ディー・ピショップはヴァル・ヴェルデの銀行を仲間と襲うが失敗して逮捕される。抵抗した大牧場主ストーナーを撃ったため、絞首刑と決まる。死刑執行の前日、やって来た執行人はディーの兄メイスだった。話を聞き、本物に成り済まして来たのだ。絞首執行の直前、メイスは弟にこっそり銃を渡し、逃走を助ける。保安官のジュライ・ジョンソンを先頭に町中が追跡に向かう中、メイスは銀行に入り、金を奪う。ディーは、メキシコへ逃げる途上、ストーナーの未亡人マリアを拉致し、人質にする。弟の後を追ったメイスが合流。北軍側で戦った兄と、カントリル・ゲリラ隊員として南軍側で戦った弟の久々の再会だった。マリアを愛していたジョンソンは執念で追跡を続け、サピナスというゴーストタウンに潜んでいたディーたちを捕まえる。しかし、バンドレロ(メキシコの盗賊)たちの襲撃を受け、

ジョンソンはディーたちに銃を渡して、共に応戦する。マリアを襲った盗賊の首領と揉み合いになり、ディーが刺され、弟を助けようとしたメイスも撃たれる。ディーはマリアに抱かれて死に、メイスも死ぬ。彼らを葬ったジョンソンとマリアはテキサスに帰る。

．．．

二十世紀フォックス制作。原案スタンレー・ハフ、脚本ジェームズ・リー・バレット、撮影ウィリアム・H・クローシア。兄のメイスにジェームズ・スチュアート、弟ディーにディーン・マーティン、マリアにラクエル・ウェルチ、保安官ジョンソンにはジョージ・ケネディという配役。マカロニウエスタンの気分が濃厚な、楽しめる一篇です。ジェームズ・スチュアートが珍しく「悪党」を演じているのが興味深いと言えます。またラクエル・ウェルチの初西部劇としても一見の価値はあるでしょう。マクラグレンがしばしばコミカルとシリアスの間で迷うという話を先に書きましたが、本作はその塩梅が上手く行ったように思われます。ジェームズ・スチュアートへの気配りでしょうが、メイスは「悪党」であっても好感の持てるタイプに描かれており、コミカルな場面は専ら彼に割り振られています。死刑執行人に成り済ますために、メイスは本物を殺害したと思われませんが、その場面は描かれません。チャップリンの『殺人狂時代』(Monsieur Verdrot. 1947)と同じ手法で、実際の殺害場面が描かれません。彼が銀行に押し入る場面も実にジェントルかつコミカルに描かれます。むしろ、スチュアートだからこそのような悪者像になったと言うべきでしょうか。

『大いなる男たち』(The Undefeated. 1969)

【梗概】南北戦争が終わる。元南軍大佐ジェームズ・ラングドンは家族や元の部下たちを率いてメキシコのマクシミリアン皇帝の許に向かう。傭兵となるためだ。一方、元北軍大佐ジョン・ヘンリー・トーマスは、チェロキー族出身で養子のブルー・ボーイや元の部下たちと共に皇帝に売る三千頭の馬を引き連れてやはりメキシコを目指す。両者は途上で合流し、メキシコの盗賊団を協力して撃退する。ラングドンはトーマスらを独立記念日のパーティに招待する。力自慢の腕試しから大乱闘に発展するが、これで友情が芽生える。ドゥランゴ砦に到着したラングドン一行はロハス將軍に迎えられるが、彼はフアレス大統領派(革命派)だった。ロハスは、トーマスの三千頭の馬と人質を引き換えにすると脅迫する。ラングドンから話を聞き、トーマスは喜んで承知する。皇帝軍を退け、無事、馬を届けた後、二人は皆を引き連れてアメリカに帰る。

．．．

前作と同じく、二十世紀フォックス制作、スタンレー・ハフ原案、ジェームズ・リー・バレット脚本、そして撮影はウィリアム・H・クローシアです。元北軍大佐トーマスにジョン・ウェイン、元南軍大佐ラングドンにロック・ハドソン。融和がテーマで

す。南北の融和があり、またブルー・ボーイ（ロマン・ガブリエル）とラングドンの娘シャーロット（メリッサ・ニューマン）が結ばれることで、白人と先住民の融和が謳われています。本作は、題材から見れば、もっと荒々しい内容、例えばサム・ペキンパーの『ダンディー少佐』（*Major Dundee*. 1965）のようなものになってもおかしくありませんが、南軍側と北軍側の間の葛藤は、「ささいな」殴り合いの場面こそありますが、実に友好的な気分の中で解決されて行きます。マクラグレンやウェインの気質の反映とも言えそうです。ペキンパーとは大違いです。

『チザム』（*Chisum*. 1970）

【梗概】 ジョン・チザムはニュー・メキシコ準州のリンカーン郡に広大な放牧場を有していた。近隣のジョン・タンストールとは友人で、またコマンチの族長とも親しい。投資家のローレンス・マーフィーは銀行を設立し、次々に近隣の土地や商店を買収し、チザムとの対立を深めていた。チザムはタンストールと共同して対抗する。追い詰められたマーフィーは息のかかった保安官助手を使ってタンストールを殺害する。彼を慕っていたピリー・ザ・キッドが保安官助手と保安官を殺害する。マーフィーは準州知事を動かし、ピリーに恨みのある賞金稼ぎのダン・ノディーンを保安官に雇ってピリーを追跡させる。ピリーはダイナマイトを手に入れるためタンストールの店に入ったところを見つかり立てこもる。状況を知ったチザムは牛の群を町に突進させる。混乱の中、チザムはマーフィーを倒す。

．．．

バトジャック社制作。脚本（及び制作も担当）のアンドリュー・J・フェナディは小説家でもあり、テレビでも脚本や制作を担当した多彩な人のようです。撮影はいつものウィリアム・H・クローシア。主演はもちろんジョン・ウェイン。マーフィー役のフォレスト・タッカーは強面のタフガイ専門でしたが、さすがに歳を重ねて黒幕役になりました。いつものようにベン・ジョンソンがウェインのサポート役を務めています。ピリー・ザ・キッドを主人公に描かれることの多い「リンカーン郡戦争」ですが、本作は大放牧業者チザムを主人公にしたのが新味です。かなり複雑な展開を見せ、実情の把握しにくい事件ですが、多くのピリー物同様に、本作もかなり自由に分かり易く物語を作っています。チザムやマーフィー自身が戦いに加わるということはありません。リチャード・ニクソンが好きな作品だったそうです（Armstrong: p.195）。ウェインの風格を見せる、そういう作品です。

『最後の弾丸』（*One More Train to Rob*. 1971）

【梗概】 ハーカー・フリートは職業的列車強盗。今回も見事強盗に成功するが、仲間のティム・ノーランに裏切られ、刑務所送りとなる。仮釈放となって、ノーランの

居るカリフォルニアのカラドールへ向かう。しかし、ノーランは、ハーカーの恋人ケイティを妻としており、また牧場への投資で無一文だった。ノーランはハーカーに中国人の金鉱夫集団から金塊を奪う計略を持ち掛ける。そういえば途上で、中国人鉱夫たちが襲われリーダーが誘拐される所に出くわしていた。実はそれもノーランの差し金だった。ハーカーは中国人たちに味方するため、売春宿に身売りしていた中国人の娘を受け出し、リーダーのチャンを救い出してノーランの襲撃に備える。しかしノーランは金塊の強奪に成功する。中国人鉱夫たちは用心に残しておいた金塊をサンフランシスコに向かう列車に載せるが、ノーランも奪った金塊を同じ列車に載せて運び出そうとしていた。ハーカーはノーランに最後の対決を挑んで倒す。ノーランは彼にケイティを託して息を引き取る。

．．．

制作はユニヴァーサルのロバート・アーサー。脚本のドン・テイトとディック・ネルソンについては他にあまり情報がありません。主演のジョージ・ペパードは、オードリー・ヘップバーンの相手役を務めた『ティファニーで朝食を』(Breakfast at Tiffany's. 1961)が、映画作品としては最も有名な出演作でしょう。しかし、専らテレビで活躍し、「特攻野郎 A チーム」シリーズのリーダー役などで知られます。相手役のダイアナ・マルドアもテレビを中心に活躍した女優。敵役のジョン・ヴァーノン是不敵な悪役が似合う役者です。復讐物語に「更生する悪者」の物語を絡め、さらに中国人金鉱夫を登場させている点などかなりの工夫が見られるのは確かです。

『テキサス大強盗団』(“something big”. 1971)

【梗概】ジョー・ベーカーは南西部地方で強盗団を率いていた。仲間の一人トミー・マクブライドの妹ドーヴァーは婚約者だったが、「何か大きい事」を為すまでは彼女の居るピッツバーグには帰らないと決めていた。彼女からの手紙が届き、こちらに来るといふ。ジョニー・コップという男に、好みの女を手に入れる代わりにガトリング銃を手に入れてやるという話を持ち掛けられる。彼は銃を使って別の強盗団を襲撃することを思いつく。次々に駅馬車を襲い、ついにこれという女性を見つける。実は彼女は、ドライ・ウエルズ砦の司令官モーガン大佐の妻メアリー・アンナで、退役した夫を迎えに東部から来たのだった。ジョーは彼女に惹かれる。また紳士的な彼に彼女も好意を持つ。他方、ドーヴァーと再会したジョーは、近日中に事を為さないと、別の男と結婚すると宣言される。モーガンは妻の誘拐を知って、斥候のブックバインダーと共にジョーを追う。ガトリング銃を運ぶコップに出くわしたモーガンは、見逃す代わりにジョーの許へ案内させる。ジョーを見つけて大佐は殴りかかるが、妻の弁護で彼を許し、彼にガトリング銃を委ねる。ジョーは仲間と盗賊団の根拠地を襲い、盗賊団を退治し、財宝を手に入れる。「何か大きな事」を果たしたジョーは、ドーヴァー、

それにモーガン夫妻と共に駅馬車で東部へ帰る。

...

ディーン・マーティン主演のコメディ西部劇。原題は大文字無し、しかも引用符で括られています。これは主人公の言葉だからですが、すべて小文字であるのは、「何か大きい、しかし実はちっぽけな事」といった含みでしょうか。

制作はマクラグレン自身と脚本のジェームズ・リー・バーネット。主演ジョー・ペーカーにディーン・マーティン、モーガン大佐にブライアン・キース、斥候ブックバインダーにベン・ジョンソンとおなじみの面々ですが、大佐の妻メアリー・アンナはオナー・ブラックマン、『007/ ゴールドフィンガー』(Goldfinger: 1964) のプッシー・ガロア役で知られるイギリスの女優です。彼女はエドワード・ドミトリク監督の『シャラコ』(Shalako: 1968) でショーン・コネリーと共に西部劇に初登場していました。本作は二作目ということになります。また、トミー・マクブライドとその妹ドーヴァー役は、ドン・ナイトとキャロル・ホワイトというやはりイギリス出身の俳優です。マクラグレンの母国とのつながりを感じさせます。プロデューサーである彼自身の選択でしょう。マクブライドという名はアイルランド独立運動に尽した政治家ショーン・マクブライドなどを想起させます。ただし、本作のマクブライド家は、スコットランド系です。トミーはバグパイプで「勇敢なるスコットランド」を披露してくれます。『スタンピード』に次いで二度目のスコットランド礼賛です。

『ビッグケーヒル』(Cahill, United States Marshal. 1973)

【梗概】 J・D・ケーヒルは連邦保安官。妻を亡くし、ダニーとビリー・ジョーの二人の息子がいる。お尋ね者を追う日々で、息子たちを構ってやれない。ダニーが銀行強盗のフレイザーの仲間に加わり、ビリー・ジョーもアリバイ工作と金を隠す役を強要される。J・Dは、ダニーを助手に、コマンチとの混血のライトフットも雇って捜索し、四人の男を逮捕するが、ダニーの態度がおかしく、真犯人を知っているのではないかと疑う。J・Dとライトフットは、息子たちが隠した金を回収する現場を突き止めるが逃げられる。ダニーたちがフレイザーの隠れ家に向かう一方、後を追ったJ・Dらは、フレイザーの一味に襲われ、ライトフットが死ぬ。ダニーはフレイザーと交渉し、自分たちの分け前以外の金を渡して別れる。J・Dに命じられて、自分たちの分け前を隠した場所に回収しに戻ると、フレイザーらが待ち受けていた。しかし最後は父が現れ、協力してフレイザーらを倒す。ダニーはJ・Dに、父親の許での保護観察で済むか、と尋ねる。

...

制作はバトジャック社。脚本はハリー・ジュリアン・フィンク、リタ・M・フィンクの夫妻コンビです。夫妻はマクラグレンが監督したテレビシリーズの作品も担当

していました。また、同じ制作・主演作品で、ジョージ・シャーマンが監督した『100万ドルの決斗』(Big Jake. 1971)の脚本も書いています。主演はもちろんジョン・ウェイン。ケーヒルの二人の息子役のゲラリー・グライムズとクレイ・オブライエンはこの後、特に目立った活躍は無かったようです。悪漢フレイザー役はジョージ・ケネディ。彼もマクラグレン作品だけでなくかなりの数の西部劇に出演していますが、善玉と悪玉半々というところですか。いかついタイプに見えますが、やさしい眼をしていて、あまり悪役向きとは言えないのでは。前作でも保安官役を演じていました。本作のフレイザーも、確かに悪者ですが、どこか甘いところ、優しいところがほのかに見えます。金の隠し場所を白状しない強情なピリー・ジョーに向かって、思わず“Son of a …”と言いかけて、“bitch”の語は押し殺します。ライトフット役のネヴィル・ブランドがよい味を出しています。殺人鬼の役が似合う、恐ろしげな顔付きで有名な俳優ですが、本作では珍しく善玉役を演じています。彼の亡くなる場面は本作一番の泣かせどころではないでしょうか。それともう一人、ケーヒルを慕う下宿屋の未亡人グリーン夫人役でマリ・ウインザーという懐かしい名前に出会えます。主に「B級」西部劇でタフなヒロインを演じた女優です。

『大いなる決闘』(The Last Hard Men. 1976)

【梗概】20世紀初頭のアリゾナ。ナヴァホ族との混血のザック・プロヴォはユマの監獄で囚役中に七人の仲間を引き連れて脱走、トゥーソンを目指す。彼を逮捕した元保安官のサム・バーゲードへの復讐のためだった。サムは金貨輸送の情報をわざと流して罠になるが、プロヴォは裏を書いてサムの娘スーザンを誘拐する。サムの訴えで新保安官のノエル・ナイは追跡隊を結成、スーザンの婚約者ハル・ブリックマンも加わる。一方プロヴォは盗んで隠しておいた金を餌に誘う仲間の協力を得て、ナヴァホ族の居留地区に逃れる。プロヴォが買収していたため、ナヴァホ族の警察の協力を得られない。仕方なく、サムとハルを除き、ナイと追跡隊は引き返す。残った二人は居留地に侵入してプロヴォを追跡する。プロヴォはスーザンを仲間にも暴行させて挑発するが、サムは策略を駆使し、ハルと協力して一人また一人と敵を倒す。最後に残ったプロヴォとは凄絶な撃ち合いの末、崖下に転落し、絶体絶命となるが、隙を衝いて辛うじて倒す。スーザンとハルはサムを助けにやって来る

・・・

原作はブライアン・ガーフィールドの小説『ガン・ダウン』(Gun Down. 1971)。彼は、辛口で知られる西部劇映画のコメント集でも著名(参考文献参照)。脚本はハリー・ジュリアン・フィンクとリタ・M・フィンク。マクラグレン最後の西部劇は、彼の人が変わったとしか思えないような、まるでペキンパー監督作品のような、暴力的な描写に満ちています。主演のサム・バーゲード役にチャールトン・ヘストン、ザック

ク・プロヴォ役にジェームズ・コバーンと配役までベキンパーを思わせませす。他に、娘のスーザン役にバーバラ・ハーシー、その婚約者ハル役にクリストファー・ミッチャム、ロバート・ミッチャムの息子です。原題の“*The Last Hard Men*”については、制作終了間際についての間にか決まったそうで、まるでポルノ作品のようだと原作のガーフィールドも出演者たちも不満だったとのこと（Armstrong: p.22）。

終わりに

以上、イギリス出身監督アンドリュウ・V・マクラグレンの生涯と作品を概観しました。ヨーロッパからアメリカを見る、アメリカを「創造する」という観点での今後の研究の基礎となるようにと考えています。

参考文献

- Armstrong, Stephen B. *Andrew V. McLaglen: The Life and Hollywood career*. Jefferson (NC): McFarland, 2011.
- Buscombe, Edward (ed.). *The BFI Companion to the Western*. London: Andre Deutsch / BFI Publishing, 1988.
- Fagen, Herb. *The Encyclopedia of Westerns*. New York: Checkmark Books, 2003.
- Garfield, Brian. *Western Films: A Complete Guide*. New York: Da Capo Press, 1982.
- Hardy, Phil (ed.). *The Overlook Film Encyclopedia. The Western*, 2nd edition, Overlook Press, 1991.
- Hoffmann, Henryk. *"A" Western Filmmakers: A Biographical Dictionary of Writers, Directors, Cinematographers, Composers, Actors and Actresses*. Jefferson (NC): McFarland, 2000.
- Joyner, C. Courtney. *The Westerners: Interviews with Actors, Directors, Writers and Producers*. Jefferson (NC): McFarland, 2009.
- Kennedy, Burt. *Hollywood Trail Boss: Behind the Scenes of the Wild, Wild Western*. New York: Boulevard Books, 1997.
- Langman, Larry. *Destination Hollywood: The Influence of Europeans on American Film-making*. Jefferson (NC): McFarland, 2000.
- Levy, Bill. *Lest We Forget: The John Ford Stock Company*. Albany (GA): BearManor Media, 2020.
- Kinenote. www.kinenote.com, キネマ旬報社
- TCM Movie Database. www.tcm.com, Turner Classic Movies.